

主体的な進路学習を促すための……

「進路の手引き」に載せたい 8章

Prologue 手引き作りの前に

プロローグ

「進路の手引き」は、生徒に進路学習に対する高校の考え方を伝えると共に、進路学習の重要性とその3年間の流れを理解させる大切なアイテムである。しかし、限られたページの中に必要なポイントと情報を網羅するのは簡単ではない。

生徒が進路選択の過程で、常にそばに置いて使えるような、役立ち感の高い手引きにするには、どいつの視点で、またどいつの点に注意して作ればよいのだろうか。これだけは手引きから外せない、という8つの章を設定し、それぞれの章の視点と盛り込みたい内容について考えてみる。

進路の手引きを作る前に、まずどいつのスタンスの手引きにするかという

全体的な構想をはっきりさせることが大切だ。手引き全体を見通してスタンスを考えておかないと、進路・進学に関する情報を何でも詰め込んで、かえって何を訴えたいのかわからないものになる恐れがある。生徒に手引きをどう使ってもらいたいかを明確にすれば、手引きのスタンスも自ずと決まってくるはずだ。

スタンスの置き方は高校の指導方針

取り巻く環境などによっていろいろ考えられるが、内容的には情報の網羅、データ集なものより、高校3年間を通じた進路学習の流れが分かるものを目指したい。進路学習の流れに沿って、生徒が自分自身で進路の方向性を見だし、考え、選択できることを目標とした手引き作りを考えたい。指導のス

タンスを明確にすることは、生徒に対してだけでなく、教師同士の指導の観点、方向性を揃えやすいというメリットもある。

手引きは、基本的には生徒向けのものだが、特別編として保護者が読むページを作るのもよいだろう。そのページで保護者が子どもと共に進路を考えたことの重要性を訴え、保護者が子どもに進路に目を向けるきっかけを作りたい。

手引きのスタンスをはっきりさせる
進路選択の観点、流れを理解させる
保護者が読むページを作るのも一案

1 chapter 進路学習の心構え

最初の章は、「なぜ学ぶのか」「高校でどのように過ごすのか」という、高校生活の最も基本的、かつ最も根本的な内容に触れるものにした。「何のために勉強するのか」という根本的な意識付けは、勉強する目的が見いだせず、学習に対する意欲が低い生徒に対してはもろろんのこと、そうでない生徒に対しては、さらに学習に向向きに取り組ませるために必要である。

勉強への意識付けのためには、やがて社会に出たときどいつの生き方をしたいか、どいつの職業に就きたいかという点に生徒の目を向けさせることが、まずその第一歩となる。そして、将来の「なりたい自分」に近づくには、どいつの道筋を歩むことが必要なのか、そのためにはどんな勉強をすべきかなどについて、「考えてみよう」と生徒に呼び掛ける内容にしたい。それが生徒の学習意欲を刺激する本筋であり、同時に将来の道筋を考え、調べ、結論を導くという進路学習の骨格を「示す」ことにもなる。

勉強も進路学習も教師から押し付け

られてするものではなく、何よりも自分のために行つものであること、たまた一度の人生を豊かなものにするために重要であることを、しっかりと理解させたい。

この進路学習の根幹となる部分が曖昧なままだと、やがて受験勉強の時期を迎えたとき、生徒の中には「何のために勉強しなければならぬのか」という疑問を再び抱き、足元がぐらついたり、安易な方向に流れたりする者が出てくる恐れがある。それを防ぐためにも、早い時期から勉強への意識付けをきちんとさせたい。

進路の手引きの巻頭となるこの章の具体的な内容としては、進路学習の重要性を理解させた上で、大まかな進路学習の流れ（自己理解 職業研究 学問研究 学部・学科研究 志望校選択）を示し、生徒に自分で考えることの重要性を理解させるようにする。

なぜ学ぶのかという根本に触れる

進路学習の重要性を理解させる

進路学習の大きな流れをつかませる

2 chapter 3年間のスケジュール表

生徒に高校における進路学習の大まかな流れをつかませるために、第2章では3年間のスケジュール表を載せた。体育祭や文化祭といった学校全体の年間行事だけでなく、この時期にどいつの進路指導を行つ「生徒にはこんなことに取り組んでもらいたい」といった指導上のポイントも含めて載せるようにする。むしろ、ここでは後者が本筋の部分と言ってもよい。具体的には職業研究、学問研究、学部・学科研究、保護者会、面談、文理選択、志望校調査などの時期やその目的、さらに学習面では各時期に合った学習スタイルの提示などが考えられる。

スケジュール表は、生徒が大まかな流れをつかむのに役立つだけでなく、教師にとつてもどの時期にどいつの指導が必要か、体系的、時系列的に再確認できるという利点がある。また、スケジュール表の予定を基に、学年団や各担任が指導の進め方を揃えたり、それに向けての環境作りを行ったりという動きが取りやすくなる。

LHRで何をやったらよいか、テ

マ設定に困る担任は少なくない。スケジュールに各時期の指導のポイントを示しておけば、担任にとつてLHR運営の際の拠り所となるだろう。職業研究、学問研究、学部・学科研究など生徒にレポートを書かせるものは、LHRで比較的取り組みやすく、すぐ使えるテーマになり得る。

実際にどいつのテーマをいつ頃盛り込むかについては各高校によって異なるが、過去何年間の指導事例を参考に年間テーマを組み立てていけば、自ずと決まってくるだろう。

ただし、あまり細かい内容まで規定すると、それに縛られてかえって動きが取りづらくなるので、ある程度の融通性を持たせることが必要だ。各担任が創意工夫を付け加えることができる余地を残したスケジュール表を作れば、生徒、担任共に活用度の高いものができる上がるだろう。

日程に進路指導のポイントも載せる
生徒だけでなく担任の指標にもなる

テーマと日程は融通性を持たせる

3 chapter 職業研究

いきなり「職業を調べてみましょう」と始めるのではなく、その前に「何のために職業研究をするのか」という目的を、生徒にはっきりと理解させることが大切だ。自分の生き方を考え、それを実現するために職業がある。したがって、職業研究は生き方研究であることを伝える。

また、職業について考えるとき、その時代の人気の職業、比較的雇用の安定した職業、待遇のよい職業といったことばかりにとらわれることのないよう、釘を刺しておきたい。そういったアプローチの仕方は、必ずしも「なりたい自分像」と合致するとは限らない。それに、現在安定している職業、待遇のよい職業が将来もその状況を保っているかどうかは分からないことにも触れておきたい。

自分はこいつの生き方をしたい、そのためにこいつの職業に就きたいというアプローチが、職業研究の本来の姿である。その点をきちんと生徒に認識

させた上で、職業研究の具体的な方法を示す。

職業と言っても、生徒は案外知られた種類のものしか知らないことが多い。職業研究ではまず、職業についての視野を広げさせ、世の中にはたくさん職業があることに気付かせることからスタートしたい。その上で、就きたい職業は何か、それは具体的にどういう内容の仕事か、どういう人が向いているか、将来どういう道が開けているか、その職業に就くにはどういった勉強や資格が必要か、といったいくつかの項目について調べてみるように生徒を促していく。

ここで大切なのは、生徒に自分で調べさせるということである。冒頭で情報網羅的、データ集的な進路の手引きは避けたいと述べたが、この章についても、職業に関する情報を網羅的に盛り込む必要は必ずしもない。職業総覧のように、ありとあらゆる職業の種類とその情報を羅列するのも、職業に対

する視野を広げるといって点で一つの有効な方法ではある。しかし、それよりも職業研究の手順を示して、具体的な内容については生徒の手で調べさせることの方が大切である。手引きはあくまでもきつかけ作りと考えたい。ただし、研究の仕方、必要な資料などについては、できるだけ具体的に示しておくようにする。

- 職業研究の具体的な取り組みやそのための資料としては、次のようなものが考えられる。
- ・ 社会人による講演会の実施
 - ・ 公的機関(裁判所など)の訪問
 - ・ 企業訪問
 - ・ ボランティア活動への参加
 - ・ 卒業生との交流会
 - ・ インターネットの活用
 - ・ 生き方や職業について考えさせる本の推薦
 - ・ 『職業まるわかり事典』(弊社刊)の活用

こつとした取り組みは、実施しただけで終わらせるのではなく、生徒に自分の頭で整理させ、考えさせることでより実り豊かなものにした。そのため、実施後のレポート(その職業に惹かれる理由、必要な勉強、資格、今後の展望など)を書くように指示しておきたい。手引きの中に、生徒が調べた

内容を、レポートとして書き込む欄を設けておく方法もある。

前にも述べたように、この章を職業総覧にする必要はないが、参考例として、いくつかの職業に就くまでの道筋を挙げておけば、生徒が職業に就くまでを具体的にイメージする手助けとなるだろう。例として載せる職業は、その高校の方針、高校の置かれている地域環境などによって異なってくるであろうが、高校生に人気の職業の他、卒業生が就いた職業から選択してもよい。その際、先輩が具体的にどの大学、学部・学科に進んでその職業に就いたかまでを紹介すれば、生徒は職業と大学、学部・学科とのつながりを、よりリアルに感じ取ることができよう。

また、名前の似た職業や同じ業種ではあるが仕事内容の異なる職業など、生徒が間違えやすい、あるいは迷いやすい職業をいくつか挙げて、簡単に比較してもよいだろう。

- なぜ職業研究が、を理解させる
- 職業についての視野を広げさせる
- 手引きを職業総覧の類いにしない
- 手順を示し、生徒の手で調べさせる
- 調べたら、自分の頭で考えさせる
- 職業に就く道筋の参考例を示す

4 chapter 学問研究、学部・学科研究、文理選択

学問研究、学部・学科研究には二つのアプローチの方法がある。一つは、職業研究によって就きたい職業を絞り込み、その職業に就くにはどういった学問が必要か、そしてその学問はどの大学の、どの学部・学科で学ぶことができるかを研究する方法。もう一つは「大学で、学を勉強したい」と学問に対する興味・関心がある程度はつきりして、その観点から学問、学部・学科について研究する方法。このように学問研究、学部・学科研究への入り方には大きく分けて二通りあることを示しておけば、生徒は無理に自分を一つの型にはめ込むことなく、心理的にも余裕を持って研究に臨むことができる。

生徒は、学問、学部・学科の内容について、名前から連想されるイメージだけで捉え、実際の研究内容を正しくつかんでいないことが少なくない。特に名称が似ている学問、例えば外国文学と外国語学、経済学と経営・商学、生物工学と農芸化学などは要注意だ。また、近年増えてきた学際系(総合科学、

人間科学など)も、学部・学科名では内容が分かりにくいものが多い。さらに、同じ学部・学科名でも大学によって研究内容が異なることがある。

学問の内容を調べるのは生徒がやるべきことだが、学問の中身を判断しにくかったり、誤解しやすい学部・学科の例を手引きの中にサンプルとして挙げておき、その学問内容を簡単に説明しながら、学部・学科の内容を名前から安易に判断してはいけないことを伝えるのも一つの方法だろう。

職業研究の章と同様、この章で必要なのは学問のすべてを正確に理解させることではない。学問について生徒が自分の手で調べ、自分の頭で考えることがこの研究の、そしてこの章の本筋である。自分で調べることで学問、学部・学科のそれぞれの違いも分かってくるし、調べることを通じて自分の志望も段々固まってくる。

生徒に調べさせる際、調べるルートについてはきちんと提示してやって、自分の力で調べられる環境を整えるようにしたい。具体的な取り組み、研究

材料には次のようなものが考えられる。

- ・ 大学案内、シラバスによる研究
- ・ オープンキャンパスへの参加
- ・ 大学教授による講演会
- ・ インターネットでの大学HP、研究室HPへのアクセス
- ・ 『学べる大学探せる事典』(弊社刊)の活用
- ・ 本誌の連載「似たもの学問徹底比較」の活用(学問内容の違いが分かりにくい学問について)

また、進路指導室には大学研究、学部・学科研究のためのいろいろな資料があることを伝え、積極的に活用するよう指示する。進路指導室のどの棚にどんな資料があるか、見取り図を載せておけば利用しやすいだろう。ある程度調べたら、その結果を一度書き出して整理するようにさせる。

文理選択は、3章の職業研究、この章の学問研究、学部・学科研究の作業を通して自ずと決まってくる。とは言え、生徒の中には職業や学問への興味とは別に、科目の得意・不得意で文理選択をしようとする者もいる。もちろん、それも大切な要素ではあるが、それだけではなく、将来像と結び付けて選択するよう伝えておくようにする。手引きにおける文理選択の説明は一般論で終わるのではなく、その高校の

外国文学	外国語学
情報工学	電気・電子・通信工学
経済学	経営・商学
生物工学	農芸化学
社会学	人間科学
社会福祉学	医療福祉学

これらの学問については、本誌99年度の各号の「似たもの学問徹底比較」の中で紹介しています。

カリキュラムに沿って、文系コースと理系コースの違いなどを具体的に説明する所まで踏み込みたい。文理に分かれるとカリキュラム面で具体的にどういった違いがあるのか、例えば英語の授業は週何時間になるのか、数学の履修範囲はどう違うのか、各科目の単位数はどうなるのか、など具体的に分かりやすく説明する。カリキュラムの参考例を文理両方載せてコースによる違いを説明する他、各教科担当が協力して科目の学習内容なども簡単に解説すれば、生徒はそれぞれのコースの中身をより深く理解できるはずだ。

- 学問研究は二つのアプローチ法を示す
- 内容の似た学問、学部・学科に注意
- 生徒に自分で調べ、考えさせる
- 調べるルート、資料を提示する
- 将来像と結び付けて文理選択をさせる
- 文理コースの違いを具体的に説明

5

chapter

大学入試の仕組み

教師にとっては、これくらいは知っているで当然と思える大学入試の仕組みでも、生徒は意外なくらい正しく理解していないことが多い。教師と生徒の入試制度に対する認識、知識には大きなギャップがあることを念頭にこの章を構成したい。

したがって、入試のごく基本的な仕組みから丁寧に、正確に説明することが必要だ。手引きの中で解説したい項目には次のようなものがある。

- ・国立大と私立大の入試制度の違い
- ・センター試験の仕組み
- ・2段階選抜の仕組み
- ・前期、後期、公立中期日程試験のスケジュールと併願パターン
- ・推薦入試（指定校推薦と一般公募推薦）の仕組み
- ・方式別入試の紹介
- ・傾斜配点、配点比率とは何か

これらの項目の巻末に詳細資料をp.24から紹介しています。

これらの中には、図表で説明した方が分かりやすいものもあるので、必要

に応じて図表を入れるとよいだろう。

また、ある入試制度の一例として具体的な大学名を挙げるときは、「年度によって入試の内容が変わることもあるので注意が必要」と一言付け加えておきたい。

個別大学の入試制度について、生徒が調べられるように具体的な資料を示しておくことも必要だ。各大学の入試科目や配点、入試日などをまとめた情報誌を進路指導室や各教室に常備している場合、それら入試関連の資料のある場所、資料の見方を手引きの中で解説しておきたい。

また、大学入試の仕組みの他に、国立大と私立大の学費の違い、大学によっては学部・学科でキャンパスの所在地が異なることも書き添えておいた方がよいだろう。

基本的仕組みから丁寧に正確に説明

図表などで分かりやすく示す

入試関連の資料の見方を提示する

6

chapter

成績の見方

高校の成績については、評定平均値とは何か、どのように算出するのかを説明する。推薦入試への出願条件を自分で確認できるように、評定平均値を学年ごとに書き込む欄を作るのもよい。

模試の成績については、まず偏差値とは何か、を説明する必要がある。偏差値という言葉に中学時代から馴染んでいるにもかかわらず、それが受験者集団の中の相対的学力を示すものであることを理解できていない生徒は案外多い。母集団が異なれば同じ出来でも偏差値が変わり得ること、自分の力の推移を見るときは、同じ母集団のもので見なければならぬことを理解させる。これについては、生徒や保護者の多くが理解できていないと考えておいた方がよい。また、3教科型で算出された偏差値を5教科型の大学の判定にそのまま当てはめることはできないことも説明しておく。

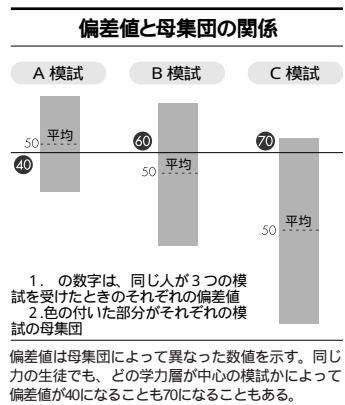
高校入試と大学入試では、模試の成績と合否との相関に違いがあることに触れておきたい。高校入試では両者がかなり正確に対応している、受験者

の項目を書かせる場合は注意が必要だ。見栄を張って「受験勉強を始めたのは遅かった」などと事実とは異なることを書く生徒がいるからだ。また、実際に受験勉強のスタートが遅かった生徒でも、普段の授業の予習・復習をきちんとやっていて科目の理解度が進んでいたために合格できた場合もある。

評定平均値の算出方法を説明する

偏差値の持つ意味を理解させる

偏差値は学習の目安であることを示す



の合否分布の幅が狭いのに対して、大学入試はその幅が広い。ある大学を受験した人たちの偏差値の度数分布表などを載せて、生徒に、合格者、不合格者共に、偏差値の幅がかなりあることを実感させるのもよいだろう。

偏差値が出る度に一言「憂する生徒は多いが、本来、偏差値は自分の現在の力を知る目安であり、それを反省材料にして今後の勉強にどう生かすかが大切であることを理解させるようにしたい。

7

chapter

志望校、受験校決定

学問研究、学部・学科研究を経て、いよいよ志望校を絞り込み受験校を決定する。志望校については、大学、短大、専門学校で学べる学問内容の他、入試の内容、卒業生の就職状況、取得できる資格、学費などを複数校について調べさせる。志望校決定のために重要な視点を、手引きの中に掲げておくのもよいだろう。

主に3年生が対象となる受験校決定については、その手順のポイントを示しておきたい。特に、複雑な国立大の入試の仕組み（入試日程上、原則2校しか受験できないことなど）をはじめとした、国立大それその受験上の注意点を述べておく。

そして、第1志望校を軸に安全校、挑戦校と、併願パターンをバランスよく決定するよう指示する。併願パターンは難易度に差を付けたプランが望ましいことを強調し、挑戦校と安全校までの偏差値の幅はおよそ10程度は必要であることを述べる。同じレベルの大学ばかり受けようとする生徒もいるので、併願パターンの意味と目的を理解

させることが必要だ。入試の配点にも注意させたい。同じ偏差値レベルの大学であっても、例えば英語の配点の高い大学は英語を苦手とする生徒には不利であるなど、自分の特性に合った受験校、併願校選びをするよう伝える。

また、調べる入試科目は最も受験科目の多い大学、学部・学科に揃えさせる。これは、入試を控えた3年生だけでなく、1、2年生にとっても重要になる。低学年の段階で、挑戦校の入試科目を調べさせるのも履修科目選択の際に役立つからだ。

生徒や保護者はその高校の平均的受験スタイル、つまり一人平均何校受けるのか、受験にどのくらい費用がかかるのか、ということを知りたい。しかし、これらの平均には何の意味もない。40人の生徒がいれば40通りの受験スタイルがある。自分の適性と希望に沿った受験校選びをするよう伝えたい。

複数の志望校の必要項目を調べる

バランスの取れた併願パターンを

個々に応じた受験スタイルを支援

8

chapter

合格体験記

先輩の合格体験記は身近でリアルなイメージがあるだけに生徒に訴える力が大きく、是非手引きに載せたい項目である。合格体験記は、読んだ者が励まされて、「よし、自分も合格目指して頑張ろう!」という気持ちにさせることに最大のねらいがある。「来年は、私も合格体験記を書く立場になるぞ」と、体験記そのものが受験勉強の動機付けの一つになることもある。

合格体験記を生徒に頼むときは、盛り込むべき項目をあらかじめ挙げておくと、こちらのねらいから外れないものができ上がりやすい。項目としては次のようなものが考えられる。

- ・なぜその大学（学部・学科）を志望したか
- ・苦手科目の克服法、得意科目の伸長法
- ・長期休暇の過ごし方
- ・スランプをどう乗り越えたか
- ・入試直前をどう頑張ったか
- ・合格の喜び
- ・先輩へのメッセージ

「」の項目を書かせる場合は注意が必要だ。見栄を張って「受験勉強を始めたのは遅かった」などと事実とは異なることを書く生徒がいるからだ。また、実際に受験勉強のスタートが遅かった生徒でも、普段の授業の予習・復習をきちんとやっていて科目の理解度が進んでいたために合格できた場合もある。

一般的な傾向として、生徒は体験記の中から自分の志望校に受かった先輩や、顔見知りの先輩の文章を選んで読みたがる。それ以外の体験記にも接してもらったために、読み手の興味を惹く項目について「一覧表や表組みにする方法もある。項目は「役に立った参考書」「勉強のやり方」の他、先程挙げた体験記に盛り込む項目から選んでもよい。

合格体験記を書いてもらう生徒は、国立大合格者と私立大合格者、文系と理系など、ある程度バランスが取れるよう配慮したい。

合格体験記は訴え掛ける力が大きい

体験記に盛り込む項目を指定する

一覧表など見やすさの工夫も必要